

# 自己表現能力を育成する音楽科，美術科，外国語科の授業 開発

—即興，創造，コミュニケーションの視点から—

井上 翔太・神垣 友紀子・高橋 舞・堂面 貴洋・中村 和世・徳永 崇

Abstract: The purpose of this study is to clarify the effectiveness of the collaborative study between music, art, and English in fostering the ability of self-expression. We intentionally related these three subjects by setting up improvisational, creative, and communicative activities in classes. Two collaborative lesson plans were conducted with the aim of getting closer to the essence of self-expression by expressing themselves in different ways. According to the questionnaires, these lessons increased their abilities to express themselves. Some of the students tried to grasp their characteristics more deeply through the process of thinking abstractly. However, they had little time to acquire basic skills and the limited ways of expressing themselves, so it was difficult for some of them to express themselves as they wanted to. It seemed that our lessons were effective to the students when they got basic knowledge and skills and these students tried to make full use of their knowledge and skills. In contrast, there were few students who tried to get knowledge and skills actively to the goal of developing this capacity for self-expression. In addition, many students did not reach the point of expressing themselves to others in mind. The result shows that students were able to have opportunities to approach the essence of the music and art classes, which is to keep questioning how we should be and how we should live our lives. On the other hand, there are still issues to be solved, which are caused by the restricted learning environment and the instructional planning.

## 1. はじめに

令和2年11月，広島県教育委員会は「広島県の15歳の生徒に身に付けていてもらいたい力」と題して，「自己を認識する力」「自分の人生を選択する力」「表現する力」の3つの力を掲げ，同時に令和5年度から公立高等学校入学者選抜において，一次選抜，二次選抜ともに自己表現にかかわる面接を実施することを発表した。しかし，青年前期である中学生は，「思春期に入り，親や友達と異なる自分独自の内面の世界があることに気づきはじめるとともに，自意識と客観的事実との違いに悩み，様々な葛藤の中で，自らの生き方を模索しはじめる時期である。」「仲間同士の評価を強く意識する反面，他者との交流に消極的な傾向も見られる。」（文部科学省，2009）<sup>1</sup>とされるように，学級等の集団

の中で自己を表現することについて消極的になる側面も見られる。また，昨今新型コロナウイルスの影響で新しい生活様式が提言され，学校現場でも，「新しい学校生活」（文部科学省，2020）<sup>2</sup>により，これまでの学習への制限が加わることとなった。これは，音楽科での合唱の取組など仲間と協力しながら自己表現することを主眼においた学習活動を展開したり，異年齢交流や校外での学習を積極的に実施したりしてきた本学校園での教育に対して非常に大きな影響があると言えるだろう。

ここで，自己表現に関連し，かつ教科固有の技能が求められる音楽科・美術科・外国語科に着目する。まず音楽科・美術科については，2017年の学習指導要領の改訂において「生活や社会の中で」という語句が追記された。知識・技能

---

Inoue Shota, Kamigaki Yukiko, Takahashi Mai, Domen Takahiro, Nakamura Kazuyo, Tokunaga Takashi Fostering the Ability to Express Oneself in Music, Art, and Foreign Languages: Improvisation, Creation, and Communication

を身に付け、主体的に思考力・判断力・表現力を育成することに加え、人は感情を社会の脈絡においてどのように表現してきたか、という自己との関連を認識させる意図が読み取れる。また、外国語については、近年、言語活動のみではなく、他教科と連携し様々なかたちで表現する活動が見られるようになった。しかし、他教科と関わることで思考力・判断力・表現力を育成しようとしたり、2教科以上の授業と連携したりするなど、より多角的な視点から表現について検証した事例は少ない。

なお、これら3教科は、自己表現する上で各教科の技能の習得を前提とし、かつプレゼンテーションの機会を確保しやすいという共通した特性を持つ。すなわち、各教科の目標を達成しながら自己表現することが可能と言える。併せて、自己表現の内容と方法は人によって多様である。個人の枠にとどまらず、他者理解や社会との関わりについての気づきを促すことができれば、より深い洞察や共感を伴った表現能力の獲得につながるであろう。

上記から、音楽科、美術科、及び外国語科の3教科による協働的な授業を行うことが、現在求められている自己表現力を高める上で有効であると考えた。本研究は、これら3教科による横断的な授業を開発・実践し、検証することを通して、自己表現能力の育成を軸とした各教科、及び教科合同の授業の可能性について、示唆を得ることを目的とする。

## 2. 研究の方法

### (1) 自己表現能力の定義

本研究では、生徒の内面の表現に加え、他者との相互理解が重要であることから、堀之内ら(2016)<sup>3</sup>を参考に、自己表現能力を「一人一人のものの見方、考え方、感じ方を大切にし、相手の気持ちを考えるなど他者意識をもって、自分の意見や考えを豊かに相手に分かりやすく伝える力」と定義する。

### (2) 授業開発の視点

各教科の授業、及び教科合同の授業において、即興、創造、コミュニケーションの3つの視点から、自己表現能力の育成に係る指導計画を立てた。なお、各視点に関わる学習活動については、それぞれ即興の場面、創造の場面、コミュニケーションの場面と表記する。各場面については、中学校学習指導要領(平成29年告示)解

説音楽編<sup>4</sup>を参考に、以下のとおり定義した。これらを意図的に設定しながら授業開発を行った。

- ・即興の場面：作品を作ったり英作文を書いたりするときに、音のつながり方を試してみたり、色をつけてみたり、準備なしでやりとりをしてみたりするなどの具体的操作を行う場面
- ・創作の場面：作品や英作文などを、自分の伝えたいイメージや意図に応じて作り直すなど、思考や推敲の伴う場面
- ・コミュニケーションの場面：他者に自分の考えを伝えたり、他者から評価を受けたりするなど、他者と意思疎通を行う場面

### (3) 分析の視点と方法

自己表現能力の育成を軸としたとき、音楽科、美術科、及び外国語科の各教科、および教科合同の授業にどのような影響が出るのかについて検証するため、以下の①～③の視点を設定した。

- ①自己表現能力の育成を目標と設定することは、各教科の目標を達成しながら豊かに学ぶ生徒の育成につながるかどうか。
- ②各教科や教科合同の授業において、授業者が即興、創造、コミュニケーションの場면을意図的に設けることは、自己表現能力の育成につながるかどうか。
- ③各教科や教科合同の授業において即興、創造、コミュニケーションの場면을学習計画のどの部分に位置づけ、どのような学習活動によってこれらの場面を確保することが自己表現能力の育成において効果的であるか。

その上で、単元末でのパフォーマンス・テストや創作した作品、生徒への質問紙などを用い、生徒の変容を質的・量的に見取ることにより、効果検証を行った。また、自己表現能力の育成の評価指標として、土井ら(2009)より一部引用・改変<sup>5</sup>したものをを用いた(表1)。なお、中学校3年生80名のうち、すべての授業に参加した44名のデータを分析対象とした。

表1 自己表現能力の育成の評価指標

評価項目	
1	意見を集約し、論点を明確に話することができる。
2	相手のリアクションによって表現の仕方を変える

	ことができる。
3	感情をコントロールしながら、相手に思ったことを伝えることができる。
4	周囲の様子を見て適切な立ち振る舞いをする事ができる。
5	大きな声ではっきりと感情をのせて相手に伝えることができる。
6	1つの伝えたいことについて2つ以上の言い方で表現することができる。
7	時と場に応じて心の動きを表情で表現することができる。
8	伝えたいことを音楽や美術、英語など日本語以外のもので伝えることができる。
9	恥ずかしがらず自分を表現することができる。
10	自己表現することが得意である。

音楽科・2時間 令和4年7月	分析し音楽作品で自分を表現する。	
フェーズ3 英語科・1時間 令和4年9月	・英語で自分を表現する。	・英語での自己紹介と自己紹介文の作成
フェーズ4 音楽科・美術科・1時間 令和4年9月	・音楽・美術作品から伝わるその人の性格を言語化する。	・音楽・美術作品の相互鑑賞
フェーズ5 英語科・1時間 令和4年9月	・フェーズ4でのフィードバックを受けて英語での自己紹介を作り直す。 ・本単元への取組や自己表現能力について自己評価する。	・自己紹介の作り直し ・アンケートの実施

### 3. 単元の構想

本研究では、各教科、および教科合同の授業において、音楽・美術作品の相互鑑賞を通して英語表現を深めることをねらいとした単元1「What am I? How can we express?」と、自分の性格や心情を表した英語の形容詞などを表現意図として創作することにより、音楽と美術の表現を深めることをねらいとした単元2「自分のココロを表現しよう」の2つを実施した。各単元における各教科同士の関連を図にしたものを図1・2に、段階ごとにおける活動内容を表2・3に示す。

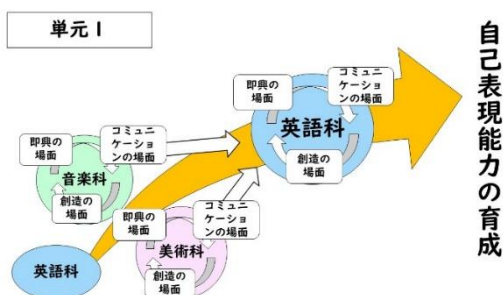


図1 単元1における各教科の関連のイメージ

表2 単元1の各段階と活動内容

段階 教科・時数 実施月	ねらい	活動内容
フェーズ1 美術科・4時間 令和4年6月	・自分を見つめ、美術作品で自分を表現する。	・自画像の制作
フェーズ2	・自分を自己・他己	・旋律の創作

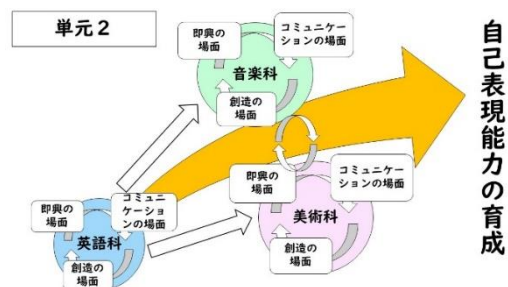


図2 単元2における各教科の関連のイメージ

表3 単元2の各段階と活動内容

段階 教科・時数 実施月	ねらい	活動内容
フェーズ1 英語科・1時間 令和4年11月	・自分の性格や心情を表す多くの形容詞に触れ、2軸に分類することで客観的に自分を見つめる。	・自分の性格や心情を表す形容詞の書き出し、分類
フェーズ2 音楽科・美術科 4時間 令和4年11月	・分類した形容詞を表現意図にしながら、自分を見つめ、音楽や美術作品で自分を表現する。 ・単元の中での即興、創造、コミュニケーションの場面の有効性、自己表現能力について自己評価する。	・旋律の創作 ・コラージュ作品の制作 ・アンケートの実施

<p>フェーズ 3 音楽科・美術科 4時間 令和4年11月</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・創作において、他者の意見を参考にするとともに創作におけるアイデアを取り入れる。</li> <li>・分類した形容詞を表現意図にしながらか、他者の意見を参考にしながら自分を見つめ、音楽や美術作品で自分を表現する。</li> <li>・本単元への取組や即興、創造、コミュニケーションの場面の有効性、自己表現能力について自己評価する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中間鑑賞</li> <li>・旋律の創作</li> <li>・コラージュ作品の制作</li> <li>・アンケートの実施</li> </ul>
---	---	---

ら Google 社の SONG MAKER を使用した<sup>7</sup>。以下の図 4 は、生徒の作品を井上が採譜したものである。



図 4 生徒 A 音楽作品

#### 4. 授業の実際

表 2 で示した段階に沿って、抽出児 A の生徒を中心に単元 1 の授業の実際を述べる。

##### (1) フェーズ 1 (自画像の創作)

美術では、鏡や写真などで自分の姿を見つめながら自画像を制作した(図 3)。制作にあたって、制作の過程をレポートで提出することとし、過程も自己評価できるように環境設定した。また、作品完成後には、作品のテーマや表現の工夫と意図などについてレポートにまとめ、提出することとした。



図 3 生徒 A 美術作品

##### (2) フェーズ 2 (旋律の創作)

続く音楽では、ジョハリの窓<sup>6</sup>を使いながら自己・他己分析した内容をもとに、自分を表す旋律を創作した。また、即興的に旋律を創作できることや視覚的に旋律線を捉えられること、オンラインでも交流ができることなどの利点か

##### (3) フェーズ 3 (自己紹介文の作成)

英語では、広島大学の留学生 5 名を各グループに配置し、グループごとにこれまでの学習を生かし、自己紹介を 30 秒で即興的に実施した。その後、自己紹介の内容について英文で表現した。

##### (4) フェーズ 4 (相互鑑賞)

音楽と美術の合同授業において、生徒は 8 人で 1 グループを作り、となりのグループの生徒が作成した音楽作品と美術作品について作者の名前を伏せて鑑賞し、作品から抱くその人のイメージについて、75mm×25mm の付箋紙に書き出した。活動後、付箋紙は A4 サイズのワークシートに作者ごとにまとめ、作者へ渡した。以下は、生徒 A の旋律と自画像を鑑賞したクラスメイトの感想である。

###### 生徒 A の旋律を鑑賞した記述より抜粋

- ・一定の旋律と高低差のあるものがある→道を踏み外すことはないが色んなことに挑戦する人。

###### 生徒 A の自画像を鑑賞した記述より抜粋

- ・明度が低い。片目がないなど少し不気味さがある。苦い思いを抱えていそう。旋律との二面性がある。

##### (5) フェーズ 5 (自己紹介の練り直し, アンケート)

単元最後の英語の授業では、フェーズ 4 での

相互鑑賞による作品から連想する作者のイメージを伝え合う活動を受けて、自己紹介を作り直す活動を実施した。図5・6は、生徒Aのフェーズ3での英作文の記述とフェーズ5での英作文の記述である。なお、生徒の氏名や誕生日は黒塗りとした。

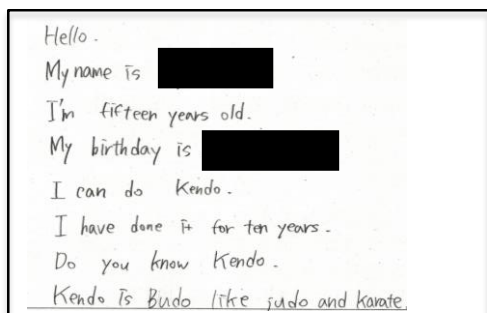


図5 生徒Aのフェーズ3での記述

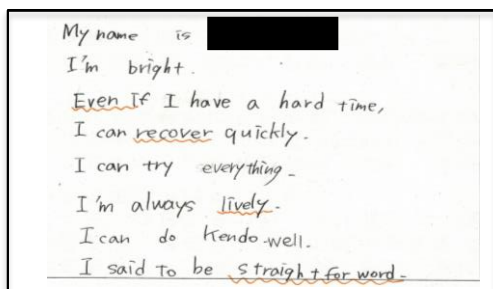


図6 生徒Aのフェーズ3での記述

単元1の終了後、単元1での学習が自己表現能力の育成などにどのように影響しているかを検証するため、表4の質問項目によるアンケートを実施した。アンケート結果より「とてもそう思う」「そう思う」の肯定的回答を抽出し、グラフにした(図7)。

表4 単元1終了後のアンケート

質問	内容
1	自己表現の力を育成するという観点から、今回の授業(音楽科での旋律創作、美術科での自画像制作、英語科での英語表現)は有効であったと思いますか。
2	あなたは、今回の単元において、自分の内面にあるものを旋律、自画像、英語表現など、自分の得意な方法で表現することができたと思いますか。
3	あなたは、今回の単元において、相手に分かりやすく伝えるという視点を意識して学習活動に取り組むことができましたか。

4	あなたは、今回の単元において、他者の作品(旋律、自画像、英作文)に触れたときに、相手の伝えようとしたメッセージを理解しようとすることができましたか。
---	--

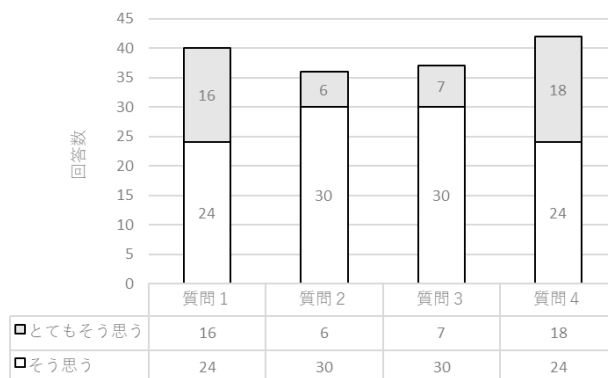


図7 アンケート結果の肯定的回答数

アンケート結果より質問4の肯定的回答が最も多かった。「音楽と美術で捉え方が変わるときもあるから、この人はどんなことを表現しようとしたのかいろんな観点から考えようと思えたと思います。」との記述があったことから、生徒は、音楽作品や美術作品での表現に触れる際にその作者の表現意図を考えながら多様な捉え方をしていたことが分かる。

続いて、表3で示した段階ごとに抽出児Bの生徒を中心に単元2の授業の実際を述べる。

#### (6) フェーズ1(形容詞の分類)

単元の初めに、英語では英語で自分の性格や受験を控えた現在の心情などを表す形容詞を書き出す活動を行った。また、書き出した形容詞について active・passive, positive・negativeの2軸に分類した(図8)。

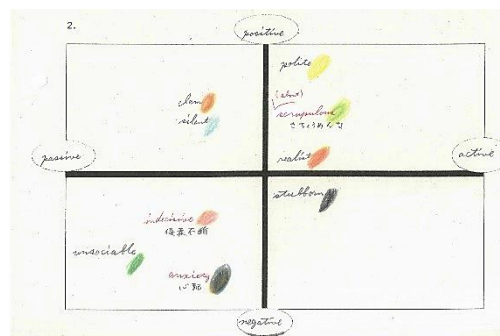


図8: 生徒Bのワークシートの記述

#### (7) フェーズ2(旋律の創作, コラージュ作品の制作, アンケート)



音楽と美術の合同授業において、フェーズ1で分類した英語の形容詞を、その形容詞のもつイメージの色に着色した。また、その色などをよりどころにしながら、旋律の創作やコラージュ作品の制作に取り組んだ。単元2の美術では①自分の性格や気持ちといった抽象的なものを具象的ではなく抽象的に表現することにより思考を促したり、多様な表現を引き出したりする、②スパッタリングやマーブリングなど偶然性を伴うモダンテクニックを活用して即興的な素材づくりを行わせる、という2つの意図から、コラージュ作品を制作した。また、音楽作品の創作、及び美術作品の制作の条件については、以下のように生徒に示した。

#### 音楽作品創作の条件

- ・ SONG MAKER を使用して創作する。
- ・ 音が連続した旋律でも音をちりばめたような旋律でもよい。
- ・ 小節数は問わない。

#### 美術作品制作の条件

- ・ 必ずコラージュ素材を作成し、B4サイズのスケッチブック一枚にコラージュ作品を制作する。
- ・ イラストや文字など意味のあるものは素材の中に入れてはいけない。
- ・ 作品は平面でなく立体作品でもよいこととする。

なお、フェーズ3では自分の作品を他者に評価してもらうことにより、新たな視点に気づくなど旋律創作や作品制作のための情報収集を行う中間鑑賞を実施した。また、そのことによる学習の深まりなどを見取るためにフェーズ2の活動終了後にアンケートを実施した。アンケート結果については、単元2終了後のものとまとめて後掲する。

#### (8) フェーズ3 (中間鑑賞, 旋律創作, 作品制作, アンケート)

次に、音楽と美術の合同授業において創作途中の旋律や制作途中のコラージュ素材を鑑賞する中間鑑賞を実施した。単元1と同様に、作者の名前は伏せた状態で生徒は教師が指定したクラスメイト2人分の作品を鑑賞し、作品から感じるその人の性格や、分類した形容詞がどのよ

うに作品に表れているかなどについて75mm×25mmの箋紙に書き出した。また、活動後、付箋紙は作者に渡された。以下は、生徒Bの旋律と自画像を鑑賞した生徒の感想である。

#### 生徒Bの旋律を鑑賞した記述より抜粋

- ・ 規則的なので、几帳面さが出ていた。耳に残る暗くネガティブな不協和音が悩みやもどかしい気持ちを表していると思った。

#### 生徒Bのコラージュ素材を鑑賞した記述より抜粋

- ・ 濁った色から「口数が少ない」ことで伝えきれていない気持ちがあっっているいろいろな感情が混ざっているのを表していると思った。

また、生徒は中間鑑賞の付箋紙でのフィードバックを受けて、作品を練り直した(図9)。



図9 作品を作り直す様子

なお、作品における表現の工夫などを見取るため、音楽・美術作品と共に、表5で示した質問項目への回答を生徒に提出させた。

表5 表現の工夫についての質問

質問	内容
1	外国語科の学習の中で、自分の性格や心情などを表す形容詞について、書き出し、分類しましたが、その形容詞の中で表そうとしたもの(創作に大きくつながったもの)を書きましょう。
2	その形容詞のどのような雰囲気を作品で表現しようとしたか。また、その形容詞は自分のどのような部分を表していると思いましたか。
3	美術の作品について、自分の表現したかったことをコラージュにおいてどのように表現しましたか。表現の工夫などについて、記述してください。
4	音楽の作品について、自分の表現したかったことを旋律においてどのように表現しましたか。

	か。表現の工夫などについて、記述してください。
--	-------------------------

以下の図 10 と図 11 は生徒 B のコラージュ作品と旋律である。なお図 10 は、単元 1 と同様に生徒の作品を井上が採譜したものである。



図 10 生徒 B 美術作品



図 11：生徒 B 音楽作品

## 5. 考察

単元 2 の終了後には、単元 2 における自己表現能力の伸長、単元 1・2 全体を通しての伸長、また、有効と感じた即興、創造、コミュニケーションの場面はどの場面であったのかななどを明らかにするため、表 6 のアンケートを実施した。

表 6 単元 2 後に実施したアンケートの一覧

	内容	実施回数
1	・自己表現能力の育成に有効であったと感じた場面	単元 2 フェーズ 3 終了後 1 回
2	・単元 2 の活動を振り返って	単元 2 フェーズ 2・3 終了後計 2 回
3	・各教科における即興、創造、コミュニケーションの場面で有効であったと感じたもの	単元 2 フェーズ 2・3 終了後計 2 回
4	・自己表現能力育成の評価指標(表 1)に基	単元 1 フェーズ 3 単元 2 フェーズ 2・

	づくもの	3 終了後計 3 回
--	------	------------

以下、上記アンケートの 1～4 について説明する。

### (1) 自己表現能力の育成に有効であったと感じた場面について

単元 1・2 における具体的な学習場面を表 7・8 のように生徒の活動場面ごとに整理し、自己表現能力の育成に有効であったと感じた場面について複数回答可として生徒に選択させた。

表 7 単元 1 での学習場面

	学習場面
1	自分を表す旋律を創作したり自画像を制作したりした場面（音楽や美術の時間に）
2	即興的に英語で自己紹介する場面
3	自分を表す音楽や自画像を鑑賞し、相手を予想しながら鑑賞したり、その作品からその人の性格を読み取ったりして付箋に書き出した場面
4	付箋に書かれた自分の作品の印象を読み、自分の作品の表現が相手にどのように伝わったのか他者の考えを知った場面
5	付箋をもとに、自分の英語表現を見直し、更に豊かな英語表現になるように練り直した場面
6	完成した英文を相互に交流し、相手の英文を読んだ場面

表 8 単元 2 での学習場面

	学習場面
1	英語で、自分の性格や心を表す形容詞を書き出した場面
2	書き出した形容詞について、2つの軸で分類した場面
3	分類した形容詞について、友達と交流する中で、分類の違いを感じ、形容詞のもつ幅広さを認識した場面
4	分類した形容詞について、自己表現（音楽・美術）につなげるために形容詞に色をつけた場面
5	色をつけた形容詞をもとに、美術でモダンテクニックなどを使いながら、素材を作った場面
6	色をつけた形容詞をもとに、音楽で旋律を創作した場面
7	美術で制作した素材をコラージュして作品を仕上げた場面
8	素材やコラージュ、音楽を相互に鑑賞し、友達に付箋でコメントした場面
9	付箋をもとに、自分の表現が他者にどのように伝わっているか、認識した場面

10	付箋をもとに、音楽・美術の表現について、再度考え作り直した場面
----	---------------------------------

また、図 12・13 は生徒のアンケート結果をグラフにしたものである。

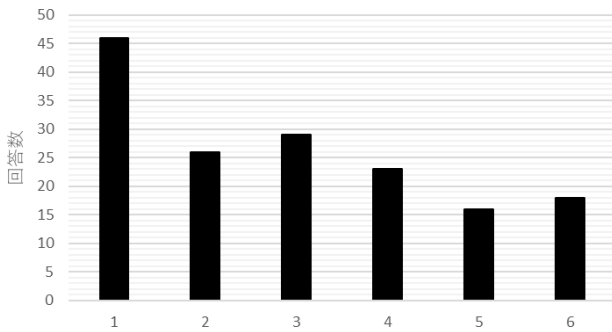


図 12 単元 1 についてのアンケート結果

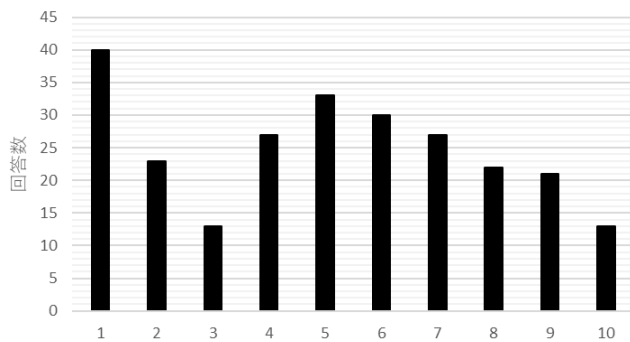


図 13 単元 2 についてのアンケート結果

単元 1 では、音楽や美術の時間に旋律創作したり自画像を制作したりしたことが有効であったという回答が最も多く、自分を表す音楽や自画像を鑑賞し、相手を予想しながら鑑賞したり、その作品からその人の性格を読み取ったりして付箋に書き出したことが有効であったという回答が 2 番目に多かった。音楽や美術の時間での創作活動という表現の活動だけではなく、作品を鑑賞する際に作品からその人の性格を読み取るという視点を設定することで、他者の作品を分析的に鑑賞する活動が自己表現能力の育成に有効であった可能性がある。また、単元 1 の最後に自身の英語での自己紹介を練り直す活動では、活動前の英作文の単語数が一人あたり平均 22.14 語であったのに対し、活動後は一人あたり平均 26.64 語と増加した。さらに、活動前後の文章を比較すると、全体の 59% の自己紹介の英作文に自己の内面や心情にかかわる記述が追加されたことから、英作文が型にはまった表現

からより自分自身を表す英語表現へと変化した様子が窺える。

単元 2 では、自己表現能力の育成において英語で自分の性格や心情を表す形容詞を書き出した場面が有効であったとの回答が最も多く、色をつけた形容詞をもとにモダンテクニックで素材を作ったり、旋律を作ったりする場面が有効であったとの回答が 2 番目に多かった。音楽科と美術科において、形容詞や色など抽象的なものを表現意図に設定することにより、創造的な思考が働き、自己表現能力の育成につながった可能性がある。

## (2) 単元 2 の活動を振り返って

単元 2 を終え、表 9 の質問項目によるアンケートを実施した。また、アンケート結果に基づき「とてもそう思う」「そう思う」の肯定的回答をグラフにした (図 14)。

表 9 単元 2 終了後のアンケート

質問	内容
1	自己表現能力を育成するという観点から、今回の授業（音楽科での旋律創作、美術科でのコラージュ作品制作、外国語科での英語表現）は有効であったと思いますか。
2	あなたは、今回の単元において、自分の内面にあるものを旋律創作、コラージュ作品制作、英語表現など、自分の得意な方法で表現することができたと思いますか。
3	あなたは、今回の単元において、相手に分かりやすく伝えるという視点を意識して学習活動に取り組むことができましたか。

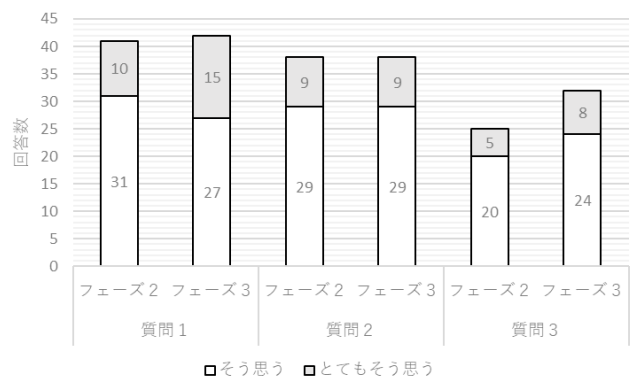


図 14 アンケート結果の肯定的回答数

質問 1・2 の結果から、本研究で定義した自己表現能力の中の一人一人のものの見方、考え方、感じ方を大切に、自分の考えを豊かに伝えることについては、授業を有効に感じ、自分



の得意な方法で表現できていたと感じている生徒が多く、本研究で実施した単元と自己表現能力との関連が示唆される。一方で、質問3については他の質問よりも肯定的回答が少なかった。生徒の記述からは、「自分では自分のことだからわかるけど、絵と音楽だけでは他の人に伝わる自信がないから。結構ありきたりな作品になってしまっているから伝わらない気がする。」など、自分自身の性格や心情など抽象的なものを表現することについて難しさを感じている様子も窺えた。

### (3) 各教科における即興、創造、コミュニケーションの場面で有効であったと感じたもの

前述したように、各教科や教科合同の授業において、即興の場面、創造の場面、コミュニケーションの場면을意図的に設定した。そして、どの場面が自己表現能力の育成において効果的と感じたか、生徒にアンケートを実施した。生徒に示した各場面の具体例を表10に、アンケート結果を図15に示す。

表10 生徒に示した各場面の具体例

音楽科	
即興	自分の性格や心情を表す形容詞をもとに、まず音を入力して心象風景を表す旋律や音楽を作ろうとした場面
創造	音と音との関連を考える中で、音を足したり減らしたりするなど旋律を修正した場面
コミュニケーション	作品について、他者と意見を交流する中で自分の作品のよさや面白さについて再認識したり、新たな考えを取り入れようとしたりした場面
美術科	
即興	自分の性格や心情を表す形容詞をもとに、まず色や質感で表現するために素材を作った場面
創造	できあがった素材を作り直したり、組み合わせたりして新しいものを作ろうとした場面
コミュニケーション	素材や作品について、他者と意見を交流する中で自分の作品のよさや面白さについて再認識したり、新たな考えを取り入れようとしたりした場面
外国語科	
即興	まずは、自分の性格や心情を表す形容詞について書き出してみた場面

創造	形容詞を分類するなどして、自分という存在を再認識したり、あらたな価値観に気付いたりする場面
コミュニケーション	分類した表を見比べるなどしたときに、他者と自分の差異を感じたり、新たな見方を発見したりした場面

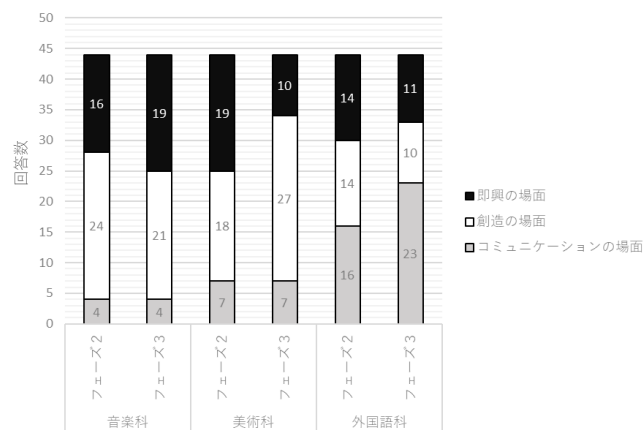


図15 アンケート結果

アンケート結果より、教科によって有効と感じる場面が異なることが分かった。特に、単元2のフェーズ2は、自分の性格や心情を表す形容詞を分類し、イメージの色に着色したものを旋律創作とコラージュ作品制作の表現のよりどころとする活動であったが、フェーズ3へ移行する際、美術においては創造の場面が有効であったと感じる生徒が増え、音楽においては即興の場面が有効であったと感じる生徒が増加している。また、外国語科においては、コミュニケーションの場面に有効性を感じる生徒が多いのも特徴である。

### (4) 自己表現能力育成の評価指標(表1)に基づくもの

前掲した表1の自己表現能力育成の評価指標に基づき、単元1のフェーズ5終了後、単元2のフェーズ2終了後、フェーズ3終了後の全3回でアンケートを実施した。その結果に基づき「とてもそう思う」「そう思う」の肯定的回答をしたものをグラフにした(図16)。

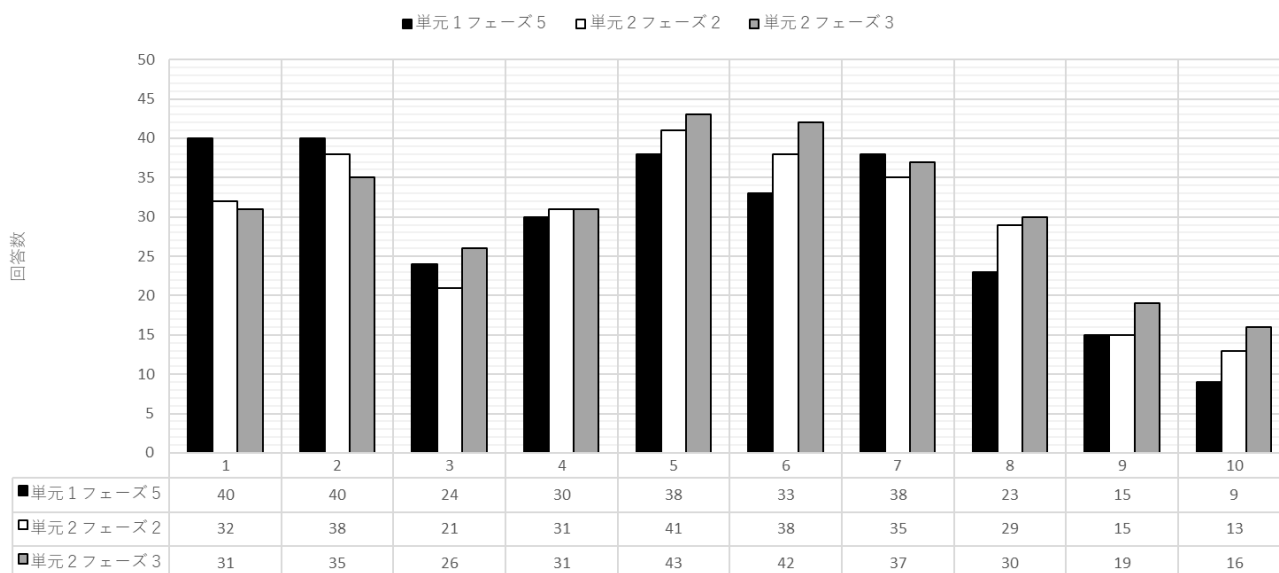


図 16 自己表現能力の育成の評価指標に基づくアンケート結果

全3回のアンケートを通して、6「1つの伝えたいことについて2つ以上の言い方で伝えることができる」の項目において肯定的回答をした生徒の数が9人増え、増加した数が最も多かった。次に、8「伝えたいことを音楽や美術、英語など日本語以外のものでも伝えることができる」の項目と10「自己表現することが得意である」の項目では、肯定的回答が7人増えた。これらのことから、自己表現能力を育成するという目標の下に実施した単元1・2で、音楽、美術そして英語など多様な表現を通して自己表現の幅が広がったことが分かる。一方、1「意見を集約し、論点を明確に話すことができる。」の項目では9人、2「相手のリアクションによって表現の仕方を変えることができる。」の項目では5人が全3回のアンケートを通じて肯定的回答から否定的回答へと変化している。このことから、自己表現の幅が広がった一方で、自分を表現するための知識や技能が相手のリアクションによって変えられるほど定着していないことを認識していることや、知識や技能の定着のための機会や時間が不十分であった様子が窺える。

## 6. 研究の成果と今後の課題

本研究の成果と今後の課題について(1)分析に関する3つの視点、及び(2)各教科での学びの視点の2点から述べる。

(1) 分析に関する3つの視点から

まず、①については、自己表現能力の育成を

目標と設定し、自分自身を見つめることやその見つめた自分自身について様々な方法で表現しようとした各教科や教科合同の授業を行ったことが、豊かに学ぶ生徒の育成につながったとアンケート(4)の肯定的回答数より言える。一方で、表現するために必要な教科の技能を身につけるための機会が十分でなかったことが、アンケート(2)の生徒の記述から言える。

続いて②については、即興の場面や創造の場面を伴う旋律創作や作品制作、英作文を推敲するときなどに相互評価などコミュニケーションの場面を設けることで、生徒は作品に込めた思いが他者にうまく伝わらないということを経験したと言える。生徒の振り返りから、他者にうまく伝わらなかったことで自分の表現を修正しようとしたなどの記述が見られたことから、即興の場面や創造の場面での学びや気づきはコミュニケーションによって深まったり広がったりすることが分かった。また、単元1・2終了後に各単元が自己表現能力の育成にどのように有効かについてアンケートを行った際、単元1・2の授業が自己表現能力の育成に有効であったことや、即興、創造、コミュニケーションの3つの場面が相互に関連しながら有効に働いたことが分かったが、それらと自己表現能力の育成の関連については明らかにならなかった。

最後に、③については、特に単元2において即興的な活動から創造的な活動への転換を図る学習を計画したが、それにより、生徒はまず活動に取り組んでみたものの、思い通りの素材や

作品ができあがらないという体験をし、続く創造の場面において、より創造的に思考しなければ意図した作品に近づけることができないという気づきを得た様子が窺えた。また、自分の性格や心情など抽象的なものを表現するための活動としてモダンテクニックを取り入れたことは、生徒の創造的な思考を働かせ、豊かに発想することにつながったと考える。これについては、アンケート（3）において、フェーズ2からフェーズ3へと移行する際、美術では創造の場面が有効と感じる生徒が増加したことから推察できる。今回の単元1・2については、即興と創造の場面を関連させたり、コミュニケーションと創造の場面を関連させたりすることで、創造的に自己表現しようとする姿が見られた。一方で、創造的に自己表現しようとしたときに、各教科での知識や技能が十分身につけていなかったり、特定の教科での表現活動に苦手意識があったりする生徒は自分の思ったような作品や英作文ができあがらない様子も見られた。

#### （2）各教科での学びの視点から

音楽の学習では、旋律創作の即興から創造へつなげる学習を展開したが、コミュニケーションの場面において、美術作品とならべて他者評価と受けるという活動が有効であった。視覚的に示された美術作品と聴覚的な音楽の作品を同時に鑑賞することにより、創作の意図が明確に伝わるなど音楽の学習が深まったと考える。アンケート（3）において、フェーズ2から3へと移行する際、音楽では美術と異なり、即興の場面が有効と感じる生徒が増加した。このことから、生徒は作品を作り直す段階においても、即興的な技能を駆使している様子が窺えた。

美術の学習では、単元2において自分の性格や心情という抽象的なテーマを扱う際、形容詞を分類したものを創作意図にしたり、抽象的な表現を用いたりすることにより、創造的な思考を働かせることにつながった。

英語の学習では、単元1において、音楽と美術の作品を相互評価し、コミュニケーションの場面で英作文へとつなげる際、得られた情報をどのように自身の英語表現に生かすか考えるなど、創造性を駆使することにつながった。また、旋律や自画像など自己の内面を表す作品をクラスメイトに鑑賞してもらい、フィードバックを得ることにより、英語表現においても内面を表現しようとする生徒の姿が見られた。また、生

徒の振り返りには、「自己表現というのはまず自分を認識しなければできないことだと思うし、その点で自分を知る事ができたのでこの授業は有効だと思いました。」という記述が見られるなど、自己表現のための自己認識の必要性を感じている様子も窺えた。

#### 引用（参考）文献

- 1) 堀之内利成, 立岡昌文, 呉屋博 (2016) 「児童の自己表現力を育む授業づくりに関する実践研究—自他尊重の態度を大切にしたい伝え合い活動に焦点を当てて—」長崎大学教育実践総合センター紀要, 15, pp. 311-320
- 2) 広島県教育委員会 (2020) リーフレット 「広島県の15歳に身に付けておいてもらいたい力を育むために」  
<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/uploa>  
2022年4月10日閲覧
- 3) 文部科学省(2009) 「子どもの徳育に関する懇談会」より「3. 子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/attach/1283165.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/attach/1283165.htm)  
2022年4月10日閲覧
- 4) 文部科学省(2022) 「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校において合唱等を行う場面での新型コロナウイルス感染症対策の徹底について（通知）」  
[https://www.mext.go.jp/content/20201210\\_mxt\\_kouhou01-000004520\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20201210_mxt_kouhou01-000004520_01.pdf)  
2022年4月10日閲覧
- 5) 遠山紗矢香, 竹内勇剛(2018) 「STEAM教育としての協調的な音楽創作活動とその評価の提案 - 児童の自尊感情の変化に着目して-」 *The Transactions of Human Interface Society* 20 (4), 397-412, 2018-11-25
- 6) 辻合華子, 長谷川春生(2020) 「STEAM教育における“A”の概念について」 *Journal of Science Education in Japan* 44 (2), 93-103, 2020
- 7) 國光妙子(2022) 「教科横断的な学習としてのSTEAM教育の実現を目指したカリキュラム開発」大阪教育大学附属天王寺小学校令和2年度教育課程研究指定校事業研究協議会発表資料
- 8) 岡田匡史(1990) 「音楽感想画の考察— 絵画と音楽, 両表現の相関—」 *The Journal for*

- the Association of Art Education 11 (0), 249-261, 1990
- 9) 土井徹, 鹿江宏明, 松本信吾, 掛志穂, 青原栄子, 大和浩子, 神山貴弥, 山元隆春 (2009) 「「自己表出としての表現力」と「対象に伝えるための表現力」を見取る指標づくり」広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要
- 10) 吉森丹衣子 (2021) 「青年期における自己主張と自尊感情との関連 — グループ学習に注目して —」淑徳大学人文学部研究論集 6 41-52, 2021-03-15
- 11) 島崎篤子 (2010) 「日本の音楽教育における創造的音楽学習の導入とその展開」教育学部紀要 = Annual Report of The Faculty of Education 44 77-91, 2010-12-01
- 12) 麓洋介, 水谷誠孝 (2015) 「「描画的な音楽表現」による教育プログラム—サウンド・アートの視点から音楽を創作する試み—」愛知教育大学幼児教育研究 18 99-106, 2015-07-31
- 13) 文部科学省 (2017) 「中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説音楽編」教育芸術社
- 14) 文部科学省 (2017) 「中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説美術編」日本文教出版
- 15) 文部科学省 (2017) 「中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説外国語編」開隆堂出版会

---

<sup>1</sup> 文部科学省 HP 子どもの徳育の関する懇談会「3. 子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題」より引用

<sup>2</sup> 文部科学省 HP 幼小中高・特別支援学校に関する情報「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～「学校の新しい生活様式」～」より引用

<sup>3</sup> 堀之内ら (2016) は、「児童の自己表現力を育む授業づくりに関する実践研究—自他尊重の態度を大切にしたい伝え合い活動に焦点を当てて—」の中で自己表現力を「一人一人のものの見方, 考え方, 感じ方を大切に, 相手の気持ちを考えながら, 自分の意見や考えを相手に分かりやすく伝える力」と定義している。本研究では, 相互理解の観点を加えるため, 「他者意識」とい

う言葉を加筆して再定義した。

<sup>4</sup> 「生徒一人一人が自らの考えを他者と交流したり, 互いの気づきを共有し, 感じ取ったことなどに共感したりしながら個々の学びを深め, 音楽表現を生み出したり音楽を評価してよさや美しさを味わって聴いたりできるようにすることを重視し, 協働的とした。」(p.20) 「イメージは, 詩や文章, 絵画や写真, 映像などから喚起されるもののみではなく, 即興的に音を出しながら様々な音のつながり方を試す中で喚起されるものもある。また, イメージは, 創意工夫の過程において, 音を出しながら繰り返し表現を試し, その音を聴くことによって, 変化したり発展したりすることがある。」(p.50) の部分を参考にした。

<sup>5</sup> 土井ら (2009) の研究では, 表現力を育成するための指標づくりについて「言語的表現力」と「非言語的表現力」の両観点から「こんなことができてほしい」という児童の姿について評価ルーブリックを作成している。また, その両観点の中で, ①「双方向のやりとりにつなげるという点でできてほしいこと」②「相手を意識して表現・伝達するという点でできてほしいこと」③「相手にかかわらず表現・伝達する際にできてほしいこと」の3つに分類し, 32 の評価項目を設定している。本研究では, 32 の評価項目から9 の評価項目を選び, 変更している。また, 10 の評価項目については井上が設定したものである。

<sup>6</sup> Joseph Luft と Harrington Ingham によって考案された「対人関係における気づきの図解式モデル」のこと。

<sup>7</sup> 対象生徒はこれまでに和声に基づく旋律創作やコード進行など旋律創作に関する学習や SONG MAKER を使用して旋律創作の学習を行っている。